



# フェノロサ夫人の

## 東京日記

Apr.1897 - May.1900

村形明子 續

岸田夏子 画



百十三、建築家クラム来日、アーネスト誕

生日、ケーキとシヤンパン

二月一六日(水) (続)

私たちが午の食卓につくとすぐアメリカ郵便が届い

に。私はアーネストのあご髭を切り揃えた。老「骨董商」キンがわが家に残した六十円の歌麿絵本の件でやって来たが、アーネストは会おうとしなかった。コービーが少し遅れて来ると会った。

書齋を訪問客用に片付ける。ガーディナー夫妻来訪、アランに土曜夜のパーティ招待状を持参。彼らのいる間にクラムとアーサー来訪、楽しいひととき——アーサーはガーディナー氏に鄭重だった。クラムは私たちの予想よりほっそりして、話題は常人並みだがもつと魅力的。明日の昼食にアンが招ばれている。既に芝の寺院訪問を計画している。楽しい新客到来、しかしたぶん今も横浜にいるオーギュストが悪夢のように私たちの上にのしかかる。どうしたらよいのだろう。

二月一八日(金)

わが愛しいアーネストの誕生日。彼は四十五歳で健康、活力、知性の頂点にある。オーギュストの名を横浜ライトホテルの宿泊者リストに見つけた。アンは十一時にナツプ家の昼食に出かけた。私はカメラまで彼

た。アーネストと私はシーブルックから大きな分厚いビジネスレターを各一通、私はハドソン夫人から一通と故郷から二通、アンは数通。既に狼狽したアーネストは彼の書簡を朗読しようとせず、私に読むよう依頼した。私はそれを持って二階へ上がり、気分が悪くて震えながら読んだ。ボストンの陪審員とケチャム双方が嫌な女性「訴訟相手の前妻」を今にも攻撃しようとしている。ここにすべてを記録することはできない。わが実家からの手紙の一通に、速達で別送のアランの時計の領収書が同封されていた。シーブルックの知らせは最初アーネストを圧倒せんばかりだった。

一日中今週金曜日のアーネストの誕生日用ケーキを焼いていた。一生懸命だったのに、焼き上がると失敗も同然だった。それでもなお食べられる筈。乗船の入港を知り、私たちは再びクラムを迎えるために「夕食時」着替えたが、来ずじまい。アーネストはシーブルックに電報を打った。

二月一七日(木)

快晴。「論争」の歴史的章を立ち上げ、占星術の章を始める。スペインとアメリカのきな臭い風評が新聞

女に同行、そこで数点よい買物、彼女は彼の誕生日デイナー用にシヤンパン、クオートボトルを奮発した。マルヤへ行き、アランからアーネストに贈る立派なインクスタンドを買った。

アーネストは四時に出講、私は一時間後ジンボーチヨ(神保町)で彼と落合ったが、散歩には遅すぎ暗くなりすぎていた。アンは青年たち「アーサーとクラム」と目黒へ散歩したので夕食に遅れた。シヤンパンで素晴らしい時を過ごしたが、あまり特別なので一同酔いに加えて消化不良を起こした。アーネストが「ローナ・ドーン」を少し朗読後私は目を閉じたが、消化不良のため何時間も眠れなかった。

百十四、オーギュスト来訪、横浜行、車夫

タケの裏切り、後任カメラ重量制限

二月一九日(土)

晴れたが風が強い。アンと私はレモンタルトを作り、私は昼食に小さなタイ(鯛)を二匹詰め物にした。オーギュストが食卓の話題に上り、私が哀れな迷え